

# 桃山学院大学のパイプオルガン

J. P. マンダー

(訳注：堀江光一)

パイプオルガンは、初めて作られた時<sup>1)</sup>から、今日私たちが知っている洗練された楽器になるまで、長い発展の過程を辿ってきました。他のおおかたの楽器と違って、パイプオルガンは簡単に移動させることができません。このことは、国（地域）が異なればパイプオルガンの発展の仕方も異なるという、たいそう興味深い事象を生み出しました。たいていの楽器は、国境を越えて、時には海をも越えて、容易に持ち運ぶことができたので、結果としてある程度の均一なスタイルを持つようになりました。しかし、パイプオルガンは、その構造が基本的な部分で同じであっても、どの国（地域）で作られたかによる違いが現れて行きました。オルガンを使用する第一の目的は、礼拝をたいせつにとり行うことにありましたから<sup>2)</sup>、ヨーロッパの国々の様々な礼拝スタイルが、その各々の地域で作られるパイプオルガンに大きな影響を与えることになりました。そして今度は、パイプオルガン（以下オルガンと略す）が、それぞれの国におけるオルガン音楽作りに影響を及ぼしました。さらに、オルガン音楽が、作曲家の楽器に対する要求という形で、オルガンの音色の改良を促進したり抑制したりしました。

人々が容易に旅行できるようになるまでは、オルガンの音色や仕様には、その外装と同様、或る地域と他の地域ではっきりとした違いがみとめられました。これが、ひいては北ドイツとオランダ、フランス、南ドイツ、イタリア、スペインとポルトガルの諸地域で、イングランドにおけると同じく、オルガン製作の大まかな流派を形成し発展させることとなり、このような流派の違いといったものは、19世紀後半に至るまで明らかに残っていました。

さて、その頃からオルガン製作者たちは、連絡を取り合ったり仕事を見学

し合ったりし始め、お互いを少しずつ高めて行きました。しかし、それぞれの基本にある地域的なスタイルはなおも残り、それを拠り所としないオルガン製作スタイルの発展が見られたのは、第2次世界大戦後のことでした。これは、もっと具体的な、がそれにもかかわらず、ある限定された観点にルーツを持ったスタイルでした<sup>3)</sup>。その一つが「ネオ・クラシック・オルガン」と呼ばれ、1960年代初め頃から発達したスタイルで、これは「シュニットガー<sup>4)</sup>の北ドイツ型」と称される流派に基盤を置くものでした。不幸なことに、この発展はたくさんの誤った思考に基づくものだったので、ネオ・クラシック・オルガンはそのルーツから外れて、独自の新しいスタイルを引き起こしてしまいました。輝かしいが耳にさわる響き、「チフ・パイプ<sup>5)</sup>」、強固な「混合ストップ<sup>6)</sup>」が、結果として、歴史的な前例とは全く似つかぬ不揃いなサウンドを生み出したのです。

多くの点で、イギリス（イングランド）のオルガンの発達は、ヨーロッパ大陸に比べると、ずっと地味なものでした。楽器自体が小さく、ペダル・オルガン<sup>7)</sup>が作られたのも、遥かに遅れてのことでした。オルガン製作そのものが、より小規模だったのです。ロマンティックの時代<sup>8)</sup>に至ると、イギリスのオルガンは、その基音系パイプ<sup>9)</sup>の音色、相対的に弱い混合ストップ、多種多様の穏和なソロ用ストップの故に注目を集めるようになりました。イギリス・オルガンに与えられた、聖歌隊や歌唱の伴奏という役割が、これらの響きを形成したのです。フランスやドイツのロマンティック・オルガン<sup>10)</sup>が、それぞれのクラシック・オルガン<sup>11)</sup>製作のルーツからほぼ切れ目なしに発展してきたのに反して、イギリスのロマンティック・オルガンには、様々な点で、それ以前のものからの完全な変革が施されました。

ネオ・クラシック・オルガンは、世界各地におけるオルガン製作と同様に、イギリスにおいても興隆を遂げ、たくさんの楽器が製作され、それらは今でも用いられています。しかしながら1970年代に入ると、このネオ・クラシック・オルガンは、その推察される歴史的なルーツから著しくかけ離れたものに発展していることがわかってきました<sup>12)</sup>。そして、いま一度各々の流派の

出発点を考える時期が来ました。イギリスの、常識的なオルガン製作者、中でも特に我々は、おのずと18～19世紀のイギリス・オルガンに関心を向け、昔の真似や模倣よりも、独自の視点に立ってスタイルの発展を捜し求めました。こうして我々が見いだしたのは、幾分穏和なイギリスの音色でした。これは、膨大なオルガン音楽のレパートリーに対して幅広い用途に耐えうる楽器を開発するための、極めて良い出発点といえるものでした。これにより我々は、独特の基音系パイプの音を持つ楽器の製作を開始しました。それは、音の立ち上がり時に発せられるチフを極めて抑えた「アッパーワーク<sup>13)</sup>」の調和によって実施することができ、違和感のあるチフや擦音（ネオ・クラシック・オルガンでよく聞かれ、今もなおヨーロッパ大陸の相当数のオルガン製作にみとめられる）に邪魔されないですっきりと溶け合ったサウンドは、音楽作りを進展させることとなりました。このようなオルガンは、趣きのある響き、多様なストップ・コンビネーション<sup>14)</sup>による自由自在性、そしてたぶん最も重要な事柄である、聴く者を疲れさせないあたたかく心地よい音色、等の十分な特長を備え、会衆の歌唱をリードするのには、特にすぐれたものなのです。

桃山学院大学のオルガンは、こういった考え方の実行の一例です。そのグレート・オルガン<sup>15)</sup>は、通常よりも穏やかで幅広い音色のオープン・ダイアペイソン<sup>16)</sup>に基づく、力強い音群を持っています。聴衆は疲れることなく、演奏者はうんざりすることなく、ずっと聞いていられる音色です。また、ほぼどんなストップ・コンビネーションも選択できます（音量の異なる響きを作り出すだけでなく、性格の異なる響きをも作り出せる）。さらにここには、優れた特質とともに広がりや暖かさを持つトランペット<sup>17)</sup>が置かれています。

スウェル・オルガン<sup>18)</sup>は、セレステ<sup>19)</sup>による非常にソフトな音の組み合わせが可能です。一方、変音ストップ類<sup>20)</sup>は、オーボエ<sup>21)</sup>と共に多くの音色の組み合わせを作り出し、オルガン音楽のレパートリーに対してとても役立ちます。フル・オルガン<sup>22)</sup>の響きは、固く、バランスのとれた、澄んだ音質で、聴く者に16ストップ<sup>23)</sup>のオルガンよりもかなり大きな楽器を連想させます。

ストップの多様性によって、クラシック・オルガン、ロマンティック・オルガン双方のさまざまな製作スタイルに合うサウンドが生み出されるのです。この暖かさ、実際のストップ数以上の楽器を連想させるサウンド、そして響きの多様性こそが、我々マンダー社のオルガンの、他社とは異なる所以なのです。またこれらは、整音、調律、そしてオルガンがその場所に設置された後の、最後の仕上げに費やした時間を通してもたらされたものなのです。

しかし、その配慮や注意は、外装やデザインに見られるものやオルガンの内から聞こえて来るものだけに限られているのではなく、内部のあらゆる場所にも払われています。見えるところも見えないところも、全ての木製部分には二層塗りの磨きがかけられており、まるで装飾展示品のように入念に仕上げられています。このような細心の注意は、耳に聞こえてくるのと同じく、内面、外面ともに見る者を楽しませてくれますし、また確実に、無駄がなく、きびきびとしたキー・アクション<sup>24)</sup>は、演奏するオルガニストを楽しませるのです。

我々は、桃山学院大学の新しいパイプオルガンが、我々のオルガン製作哲学のモニュメントとして、末永くここにあることを確信しています。

N. P. マンダー社

1991年1月10日

#### 訳注

- 1) 紀元前265年、エジプト・アレキサンドリアのクテシビウスによる「水オルガン」。秋元道雄著、「増補改訂パイプオルガンの本」、東京音楽社、平成元年6月、p. 10.
- 2) 本格的なパイプオルガンがキリスト教会に設置されはじめたのは13、14世紀頃から。
- 3), 4) 1926年、ドイツのフライブルクで開かれたオルガン会議以後、17世紀北ドイツのオルガン、特にハンブルグのアルプ・シュニットガー(1648~1719)とその一族が製作した楽器のスタイルを最高のものと捉え、それに還ろうとする運動が起こった。これは「オルガン復興運動」と呼ばれ、当時のドイツの政情とも相まって、他のスタイルとの折衷をみとめない偏ったものになっていった。第2次世界大戦終

結により、オルガン界の再建も始まったが、オルガン復興運動の影響は形を変えてなおも残り、ネオ・クラシック・オルガン或いはネオ・バロック・オルガンと呼ばれるスタイルの楽器製作を盛んにならしめた。その理想はバロックから現代に至る、あらゆるオルガン曲を演奏できることにあった。

秋元道雄著、前掲書、p.84～91.

- 5) パイプオルガンでは、音の立ち上がり時（発音時）に独特の破裂音（チフ）が混じる。その度合いは、パイプの形状により様々であるが、前述のネオ・クラシック・オルガンでは、著しく現れる。
- 6) 通常は和訳されずに、ミクスチュアと呼ばれる。このストップでは、1つの音色を複数本のパイプの音の混合によって生じさせる。なお「ストップ」とは、本学のオルガンにおいては、手鍵盤の左右に縦に並んでいる丸いつまみのことで、これを各々引き出すと発音し、押し込むと鳴らなくなるので、日本語では「音栓」という。またストップは、それが作動するパイプ列や音色を指すこともあり、たとえば「ミクスチュア」と言った場合、①その名が記された丸いつまみ、②そのつまみの作動により発音するパイプ列、③そのパイプ列が発する音・音色、以上のいずれかを意味している。
- 7) 足鍵盤、および足鍵盤に所属しているストップ。
- 8) ここでは、ロマン派音楽の時代、すなわち19世紀を指している。
- 9) 「プリンシパル（主要な）」と呼ばれる、他の楽器では模倣できない、パイプオルガン固有の音色を持つパイプ列群。これを「基音」として、そのオルガンの音の個性が決まってしまうので、ファウンデーション（基礎）と総称されることもある。
- 10), 11), 12) ロマン派の、感情豊かな音楽を表現できる楽器を「ロマンティック・オルガン」と称するのに対して、ロマン派より古い時代に作られたという意味で、また近年作られた楽器でも、古い時代の製作スタイルに拠ったという意味で「クラシック・オルガン」の名称が用いられる。一方、前述の「ネオ・クラシック・オルガン」の多くは、ロマンティック・オルガンに、オルガン復興運動の名残りである「バロックへの回帰」を付加した折衷型と言える。この「折衷」は、調和・中間というよりも、平均化して特徴を失ったマイナスの意味合いを帯びている。とはいえ、ネオ・クラシック・オルガンは、その合理性ゆえに、日本を含め世界中に展開していった。
- 13) 通常、4フィート以上のストップを指す。

現在のオルガンの音の高さは、8フィートのストップを基準に示される。本学のオルガンの場合、たとえば、①8の数字が記されたストップを用いて鍵盤の最低音

鍵を押すと、楽譜上の音と全く同じ高さの音が鳴る。②4の数字が記されたストップを用いて鍵盤の最低音鍵を押すと、楽譜上の音の1オクターヴ高い音が鳴る。③2の数字が記されたストップを用いて鍵盤の最低音鍵を押すと、楽譜上の音の2オクターヴ高い音が鳴る。④16の数字が記されたストップを用いて鍵盤の最低音鍵を押すと、楽譜上の音の1オクターヴ低い音が鳴る。⑤ $2\frac{2}{3}$ の数字が記されたストップを用いて鍵盤の最低音鍵を押すと、楽譜上の音の1オクターヴと5度高い音が鳴る。①を、8フィートのストップ、②を4フィートのストップ、③を2フィートのストップ、④を16フィートのストップ、⑤を分数ストップと呼ぶ。(分数ストップは、ほかに $1\frac{3}{5}$ 、 $1\frac{1}{3}$ などがある。)

- 14) ストップの組み合わせ。その組み合わせ方には最低限のルールがあるが、それ以上は個人の裁量に任される。「演奏者による音作り」の基本の部分を成す。
- 15) パイプオルガンは、一種の集合体である。本学のパイプオルガンは、第一手鍵盤に所属するストップを持つ「グレート・オルガン」、第二手鍵盤に所属するストップを持つ「スウェル・オルガン」、足鍵盤に所属するストップを持つ「ペダル・オルガン」の計3台の合体したものである。グレート・オルガンには、その楽器の中心となるストップが所属する。
- 16) 8フィートの基音系ストップの中でも、一番の基本となるもの。
- 17) オルガンのパイプは「唇管(フルー・パイプ)」と「舌管(リード・パイプ)」に分類できるが、「トランペット」は、舌管の代表的なもの。その発音原理は、金管楽器のトランペットとは異なり、舌(リード)の振動を共鳴器で増幅するものである。そに対して「唇管」はたて笛(リコーダー)と同じ原理で音が発せられる。
- 18) 15) を参照のこと。
- 19) オルガン全体に定められたピッチ(音の高さ)より、わずかにずらして調律(チューニング)された特殊なストップで、同系統の音色を持つ他のストップと一緒に使うと、波打つような響きを発する。
- 20) 13) の⑤の分数ストップは、他のストップと一緒に鳴らすと、鼻にかかったような独特のサウンドを生むので、「変音(ミューテーション)ストップ」とも呼ばれる。
- 21) 17) のトランペットとともに、舌管の主要なストップ。
- 22) そのオルガンに備わっているほぼすべてのストップ(19)のセレステなどは除く)を用いてのフォルテシモ(強奏)のサウンドを指す。「テュッティ」「プレノ」とも言う。
- 23) 本学のオルガンは、総数20個のストップを持っているが、このうちパイプを発音

させるストップ（これを「実働ストップ」と言う）は16個である。一般に「16ストップのオルガン」といった場合、実働ストップを16個持つオルガンを意味する。ちなみに、大阪のザ・シンフォニー・ホールのオルガンは総ストップ数62のうち、実働ストップは54個である。

- 24) オルガン内部の、キー（音鍵）とパイプの連結部分。本学のオルガンには、その部分に「トラッカー・アクション」と呼ばれる、伝統的で最良の方法が採用されている。

桃山学院大学 聖救主礼拝堂のパイプオルガン

仕 様 表

GREAT(C-a)58notes		SWELL(C-a)58notes		PEDAL(C-f)30notes	
Open Diapason	8	Gemshorn	8	Subbass	16
Stopped Diapason	8	Voix Celeste(TC)	8	Principal	8
Principal	4	Spitzflute	4	Trombone	16
Recorder	2	Nazard	$2\frac{2}{3}$		
Mixture III		Fifteenth	2	SWELL to PEDAL	
Trumpet	8	Tierce	$1\frac{3}{5}$	GREAT to PEDAL	
		Oboe	8		
SWELL to GREAT		Tremulant			

mechanical key & pedal action

electric stop action

4 pistons to SWELL ; 4 pistons to GREAT ; 4 toe pistons to GREAT  
+ PEDAL

8 general pistons ; general cancel

reversible pistons to couplers

pistons adjustable by setter piston with dual memory

総パイプ数 938本

足 鍵 盤 放射状

製作 N. P. Mander Ltd. (ENGLAND) / (株)オリエント・サウンド・  
システム

組立・整音 J. P. Mander; L. Ross; M. Blighton

完成 1990年12月